



詩集
Moon Lovers
V

たかはしみどり

Moon Lovers V

たかはしみどり

hesitation

君の笑顔を守るために
ぼくは戦う決意をした
この先 君とはもう二度と
会うことはないと覚悟して
ただ君の幸せを願い
ぼくは君に別れを告げる

君はこの悲しみをいつか忘れる？
涙をこらえる君に戸惑う
ぼくが去った後 君に
幸せは戻ってくるだろうか
君は一人で笑えるだろうか
ぼくには確かに迷いがある

戦う決意などできてない
この国の平和よりも大事なもの
ぼくが守るべきものは
その笑顔だけだから
誰も知らない世界に行こう
それがぼくの真実の願い

黒い花嫁

その日 彼女が選んだのは
悲しみ映した 黒いドレス
ただ 誰もが願うのは
心の涙が 涸れたなら
彼女に 幸せの星が降ること

その日 彼女が選んだのは
涙色の 青いブーケ
ただ 彼女が願うのは
今日 この日に集った
友に 笑顔があふれること

そのブーケの 青いバラは
「神の祝福」があるように
ブルーレースフラワーは
「無言の愛」をと 彼が好んだ
その日最後に 気持ちを込めて
彼女は友に その花を贈る

LOVE IS . . .

ひそかに見ていたい
ひそかに思っていたい
あなたに気付かれないように
遠くからで構わない

もう少し見つめていたい
もう少しそばにいたい
そしてこのまま朝になれば
二人の距離は短くなる

このまま手を繋いでいたい
このまま鼓動を聞いていたい
そしてこのまま時間を止めて
朝は永遠に遠ざかる

さよなら

その日 私が消える日は
真っ青な 空の下
爽やかな日で あるように
そして みんなで笑ってほしい
愛する人が 笑顔なら
私は何も 悔いはない
そして あなたに願うのは
最後の鼓動を 聞いていて
この手を 握り締めながら
愛していると 抱きしめて
私に涙は 似合わないから
最後は笑顔で さよならです

CLOSED

開きかけた 心の扉
やはり 閉ざしておきましょう
この心に 錠を下ろし
鍵は あなたに預けましょう
それが 私が罪を犯さず
傷つかない 唯一の術なのです

海に捨てた 脆い器は
ずっとそのまま 眠らせましょう
心を持たぬ 唇が
開くことの ないように
それが 私が罪を犯さず
誰かを壊さぬ 術なのです

誰が 心と呼んだのか
儂く壊れる この器
心はどこに ありますか
深い深い 暗闇に
それは 私が罪を犯さず
私を壊さぬ 術なのです

籠の鳥

ここから見上げる 青空は
なんと大きなキャンバスでしょう
できることなら 飛び出して
自由に空を 飛び回るのに
けれど私は 籠の鳥
飛び立つことは できません

切り取られた 四角い空は
なんと遠くにあるのでしょうか
できることなら 枠を壊して
あの空に 溶けてしまうのに
けれど私は 籠の鳥
ここから出ることすらできません

音のない声

君ともっと 話がしたくて
君をもっと 知りたくて
君の言葉を 覚えたよ
君の心から あふれてくる
たくさんの 言葉たちは
ぼくの心に しみこんでくる
その言葉たちは はばたいて
大きく 翼広げて はばたいて
もっと 伝わるといいね
だって 君のその手は
何かを 伝えたいと
ぼくに 言っているから

futari

いつもそばに 君がいたから
これからもずっと一緒だと信じてた
その気持ちが 愛だと気づきながら
君が目の前から 消えるのが怖くて
君の視線を感じていたのに
気付かないふりをしてた
そして 君の心がそれていくと
君の抜け殻 抱きしめた
何も伝えられないまま
二人はいつも すれちがってた
いまさら と君は笑うだろうけど
f u t a r iの時間が続けばいいと
目をそらさずに 素直に伝えたい

赤いリンゴ

そのリンゴは食べちゃだめだよ

あのお伽話でリンゴを食べた女の子が
ほんとはどうなったのか 君は知らないんだね
あの子はただ眠っていたんじゃないんだよ
彼女はうっかり青い鳥を逃がしてしまった
でも 誰にどうやって奪われたのかも
何を無くしてしまったのかも忘れてしまった
迷路の森をさ迷ううち お菓子の家にたどり着く
そこで会うのが あの七人の小人たちさ
彼女が迷っているうちに 魔女たちは
次から次へと彼女のものを手に入れて
夢と現実の曖昧な世界を彼女に見せるんだ

お伽話はみんなハッピーエンドなんて嘘さ
涙が落ちて弾けたとき 現実に戻れば
リンゴを食べる前の幸せな時間も 曖昧の世界のこと
自分に起こった出来事も 逃げた鳥のことも
彼女が持っていたものすべても失っているんだ
魔女に心を売って すべての記憶も無くしたのさ
だから彼女は 幾つものお伽話で旅を続ける
魔女から心を取り戻すことができない限り
いつまでたっても 元の世界に戻ることはない
いつまでも 夢と現実の世界の中にいるんだ
たくさんのお伽話は 一人の女の子から生まれてる

だから 赤いリンゴにはお気をつけて

停電の夜

君と過ごす 特別な夜
それが月の輝く夜ならいい
月の光に 心開いて
素直に君と 話ができる

でも それが停電の夜なら
キャンドルに灯を燈そう
君の心が ゆっくり解けて
ぼくの心に染み込むように

後悔

ほんとに君を 愛してるから
どんな悲劇が待っていても
君を離さないと 今なら誓える
でも 君はもう 傍にいない
後で どちらかが 後悔しても
ぼくらは 元に戻れない

ほんとは君を 無くしたくないから
すべての思い出と 引き換えても
君を忘れないと 今なら誓える
でも ぼくらは 互いに背を向けた
いつか どちらかが 振り向いても
そこには 誰の姿もない

with assurance

目の前にいるはずの 君の声は
遠い過去から聞こえるようで
君を とても遠くに感じた
君の心は何処にある

触れてるはずの 君の手は
どこかに消えてしまいそうで
不安な夜を 何度も過ごす
いつも 君の影を捜す

暗闇で聞こえた ぼくを呼ぶ声
空耳なのは 分かってたけど
君への思いを 確信した
月の町で 君を捜す

今 ぼくの瞳に映る君を
いつまでも忘れることはない
もし君がぼくを忘れてしまっても
ぼくは変わらず 君という

Shadow

床に落ちる 長い影
確かにそこに いるはずなのに
振り向いても 誰もいない
君は だれ？

青い光に 伸びる影
静かに忍び寄る 甘い罠
目を閉じても 心に映る
君は ぼく？

Confidence～打ち明け話～

いつもあなたを見ていたの
ずっと一緒に当たり前だと思っていたの
いつでも私だけを見ていてくれると思っていたの
だけど そうじゃなかったんだね
今だから 今しか言えないから
笑い飛ばして聞いてほしいの

あの時私は うそついた
ほんとはうれしかったのに
照れくさくて うそついた
ほんとはその背中にすがりたかった
ほんとは泣いてる私を抱きしめてほしかった
それなのに私は うそついた
無理してあなたに笑って見せた

もう一度好きになってとは言わないから
これからも傍にいてほしい
私は夜の空で舞い踊る 白い羽根のように
気付かれず あなたを想っていればいから
いつか 心に繋がれた糸がほどけるまで

心の涙

悲しいのは 私じゃない
寂しいのは 私じゃない
苦しいのは 私じゃない
泣いてるのは 私じゃない
寒いのは 私じゃない
心の穴に風が吹くだけ

どんなに 悲しくても
どんなに 辛くても
どんなに 寂しくても
どんなに 孤独でも
どんなに 寒くても
涙は暖かいと思える

詩集Moon Lovers V

<http://p.booklog.jp/book/63094>

著者：たかはしみどり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/midri7911/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63094>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63094>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ